

恋人はスナイパー  
エピソード3への道  
十字架編 ( )

病院・前

3台の警察車両がとまっている。  
1台の車の前、厳しい顔で立っている船木健一(36)。  
王凱歌(36)と円道寺きなこ(28)が、病院内から出て来る。  
きなこ、船木の姿を認め立ち止まる。  
凱歌1人が船木の前に進む。  
船木、凱歌に手錠をかける。  
その冷たい感触。  
船木、きなこを見る。  
きなこ、目を伏せる。  
船木、一瞬、凱歌を睨むが、車の助手席へと向かう。

車・内

運転席に清水がいる。  
助手席に乗り込んでくる船木。  
船木、バックミラーに手をかけ、凱歌ときなこの様子が映るように調節する。  
清水、ちらりと船木を見るが、すぐに視線を外へと向ける。  
バックミラーの中、凱歌ときなこが言葉も交わさず、別れを惜しんでいる。  
その濃密な2人だけの時間に、唇を噛む船木。  
刑事に促されて、後部座席に乗り込んでくる凱歌。  
凱歌と船木の目が、バックミラーの中で合う。  
凱歌が、会釈する。  
船木、慌ててバックミラーを直す。

病院・前

警察車両がゆっくり動き出す。  
見送るきなこ。

車・内

後部座席の凱歌、真っ直ぐ前を見ている。  
ふと、窓の外を見る。  
どんよりと曇った空。  
凱歌の目の中を過ぎていく。

車・外

外を見つめている凱歌。  
運転席でハンドルを握る清水。  
その向こう、助手席に船木。  
同じ1人の女を愛した2人の男を乗せて、車は走って行く。

病院・前

車を見送っていたきなこ。  
視界から車は消えた。

うつむいて病院の中へ入る。

同・凱歌の母の病室前

きなこ、病室の扉を開ける。

ベッドの上で、静かに泣いている市江。

そのそばに立っている雁太郎。

市江「違うんです。あの子・・・凱歌は私が生んだんじゃない」

雁太郎、困ったようにきなこを見る。

きなこも困惑している。

病室の中が真っ白になっていく。

テレビの画面

徐々に場面がはっきりしてくると、テレビの画面である。

ワイドショーが始まっている。

司会者「真犯人が名乗りでできたわけですね」

リポーター「はい。日本でも先ほどの2件の事件では、犯人が自首してきています」

弁護士「もう1件、元帝和建设会社会長の犬野氏の殺人未遂ですが、犬野氏は否定していますよね」

リポーター「はい。犬野氏の妻の子である王凱歌容疑者と、ちょっとした感情の行き違いがあったそうです。警察も巻き込んで大騒ぎになってしまい申し訳ない、というコメントを発表しています」

元警官「それで、銃まで持ちだすんですかねー」

弁護士、資料の端をちぎっては丸めて、元警官に投げつけ始める。

リポーター「警察が目撃したという、ライフルも拳銃も消えていたそうです」

弁護士「でっち上げですよ、警察の。事件を解決できなくて、ゴルゴ13みたいなのを作っちゃったんだな」

弁護士、司会者に笑いを投げかける。

その間にも、紙を丸めては投げつけている。

司会者、受けて笑う。

元警官「いるんですよ。だって、明らかにおかしいじゃないですか。今頃になって真犯人だなんて。ってお前、さっきからなんだよ！」

と、弁護士につかみかかる。

弁護士「ほら、そうやってすぐ暴力を・・・。こっちだって、弁護団結成してね、徹底的に闘いますよ、権力と」

弁護士、負けじと応戦する。

その間、元警官と弁護士は、とても放送できない言葉で罵り合う。

その言葉を消そうと、ピーピー音が入るが、生放送のため微妙にずれずれてしまい、放送されてしまう。

司会者、リポーター、スタッフらが止めようと必死だ。

司会者「コマーシャルいってー！」

テレビ、消される。

中華料理店『紅龍』・内

店のテレビのスイッチを切ったのは、円道寺雁太郎(61)だ。

テレビに向かって、

雁太郎「ダメだ、こりゃ」

ワイドショーを見ていた、円道寺美智(50)、円道寺はな(19)、牛田正樹(26)。

牛田「殺し屋じゃなかったんだ」

はな「お姉ちゃん、間違えちゃったの？」

一同、複雑な表情ではなを見る。

店の戸が開けられる。

美智「いらっしゃいませー」

入って来たのは、マイクを握ったワイドショーのリポーターとカメラだ。

一同「！？(ぎょっとなる)」

リポーターA「こちらに王凱歌容疑者が、ホームステイしていたんですね」

リポーターB「どういう青年でしたか？」

リポーターC「銃を持っているところを見ましたか？」

こちらが返事をする間もなく、機関銃のように質問を撃ちだしてくる。

一同、リポーターたちを店の外へと追い出そうとする。

その様子がカメラを通して見える。

リポーターたちも、なんとか取材をしようと必死だ。

カメラの中、おしくらまんじゅう状態である。

やっとのことで、リポーターとカメラを外へと追い出す。

あきらめきれずに、店の外でわめいているリポーターたち。

一同、戸を押さえる。

雁太郎「客じゃなくて、蠅ばかり寄ってくる」

警視庁・国際部国際課

あちらこちらで電話が鳴り響き、刑事たちが対応に追われている。

きなこもその1人だ。

きなこ「(電話に向かって)ええ、ですから、それはこれから・・・」

きなこの近くの電話が鳴る。

きなこ「(取って)ああ、王凱歌はですね・・・」

どちらの電話の主も、きなこに喋らせない。

勝手に言いたいことを言って、切ってしまう。

きなこ「ああ、ンもう！」

2つの受話器を同時に、カ一杯置く。

その拍子に、1枚の紙切れが舞う。

誰かが自分への教訓として書いたのだろうか、「短気は損気」と書かれている。

驚いた刑事たち、一斉にきなこを見る。

再び鳴り始める、きなこのそばの2台の電話。

きなこ「ああ、もう、いやっ！」

空港

飛行機が1機、冬晴れの空へ飛び立つ。

それを背景にワイドショーのリポーター、立っている。

その前にはカメラ。

リポーター「執行猶予を勝ち取った王凱歌さんは、中国へと帰って行きました」

リポーターから少し離れた所で、同じく飛行機を見送っているきなこ(29)がいる。

青空へと吸いこまれていく飛行機。

タイトル

警視庁・国際部国際二課

船木(37)が自分のデスクで、書類に目を通している。

きなこ、来る。

きなこ「課長」

船木「？（見る）」

きなこ「休暇をとりたいんですが……」

船木「明日？構わないが」

きなこ「いえ、長期で」

船木「どういうことかな？」

きなこ「中国へ」

船木「（ぴんときて）王凱歌を追って行くのか」

近くで話をしていた清水と黒谷が、2人の方を見る。

きなこ「……」

船木「（立ち上がり）そうなんだな」

きなこ「……はい」

清水と黒谷が、声をかけてくる。

清水「それはいけないよ、円道寺君」

黒谷「今更、何を？」

きなこ「1211が、接触してくるのではないのでしょうか」

船木、黒谷、清水、顔を見合わせる。

きなこ「守りたいんです」

きなこ、赤くなってうつむく。

そこまで思い詰めていたか、と男たちは驚く。

黒谷「中国じゃ、私たちも君を助けようがない」

きなこ「……」

船木「それでも行くんだな」

きなこ「……（うなづく）」

船木「そうか……」

一同、沈黙する。

周りの課の雑音のみが聞こえる。

船木「わかった。香港警察に頼んでおく。そちらの方から、中国側に便宜を図ってもらおう」

黒谷・清水「課長……」

きなこ「（頭を下げ）あ、ありがとうございます」

船木「（わざと明るく）ああ、君を、嫁さんにしなくてよかったよ」

きなこ「え？」

船木「（拳法の真似をして）また、暴れてくるんだろ」

と笑う。

寂しい笑顔だ。

きなこ「ごめんなさい」

きなこ、深々と頭を下げる。

頭を上げることができない。

ますます寂しそうに見つめる船木。

中華料理店『紅龍』・内

昼食時は過ぎ、客はいない。

雁太郎（62）と牛田（27）が、厨房で道具を磨いている。

雁太郎「それでも、出前の注文があるからいいよな、客が来なくても」

牛田「そんなことで満足してちゃ駄目ですよ、親父さん」

きなこが帰って来る。

きなこ「ただいまー」

牛田「あ、お帰りなさい」

雁太郎「何だ、今日はやけに早いな。まだ、おてんとさん高いぞ」

きなこ「う、うん」

雁太郎「ん？どうした？具合でも悪いか？」

きなこ「違うの。休みとったんだ」

雁太郎「おお、そうか。たまにはいいよな」

きなこ「中国へ行って来る」

はな「中国！？私も行く！」

いつの間に帰って来たのか、はな（20）がきなこの前にめっと現れる。

きなこ「わっ！？あんたどっからわいたの」

はな「せっかく中国語、習ってるんだもん。本場で通じるか試してみたいよ」

きなこ「遊びで行くんじゃないんだからね」

はな「私だって、勉強のために」

雁太郎「ホイさんか？」

はな「え？そうなの？」

茶の間から美智（51）が出て来る。

美智「ちょっと、うるさいわよ。お店で騒いじゃ駄目でしょ」

きなこ雁太郎が、真剣な表情で見つめ合っている。

美智「何？どうしたの？」

雁太郎「きなこ、お前、強くなったなあ」

きなこ「・・・(微笑む)」

骨董店・内

ところ狭しと並べられた皿や壺。

鎧や兜まである。

きなこ、品物の間を縫うようにして入って来る。

スーツケースを、ごろごろと転がしている。

きなこ「こんにちは」

八雲が愛想笑いをしながら、奥から出て来る。

八雲「へい、いらっしゃい」

八雲、きなこの顔を見ると、そのまま回れ右をして逃げようとする。

きなこ、追いかける。

きなこ「待って！頼みがあるの」

八雲「壺を割らないと約束してくれ。でなきゃ、聞かない」

八雲、駄々っ子のように両手で耳を塞ぐ。

きなこ「私を中国へ連れてって」

八雲、聞こえていない。

きなこ、耳を塞いでいる手をとって、叫ぶ。

きなこ「私を中国へ連れてって！」

八雲「そ、そんなでかい声・・・」

八雲、耳がきんきんしている。

きなこ「ごめん」

八雲「やだね」

きなこ「でしょうね。ところで私、刑事なの」

八雲「知ってるよ」

きなこ「あら、そう。日本での1211の手掛かりは、あなたしかいないから、泳がせて

おいたんだけど」

八雲「承知。だから、大人しくしてただろ」

きなこ「ホイ（慌てて言い直し）王凱歌が中国へ帰ることができたのは、1 2 1 1 が動いたからなんでしょ」

八雲「俺ら下の者は知らないよ。ははーん、ヤツを追っかけて行くのかい？」

八雲、意味ありげな目できなこを見る。

きなこ「何よ？」

八雲「（奥へ向かって中国語で）おーい、お客さんを頼むよ！」

太い声で返事をしながら、屈強な2人の男が現れる。

男たち、さっと左右に分かれ、きなこのそばに行く。

きなこの左右の腕を、それぞれ取ろうとする。

きなこ「な、何よ！」

きなこ、腕を挙げて、男たちにパンチを食らわす。

びくともしない男たち。

そのままきなこの腕を取り、持ち上げると店の裏へと連れて行く。

きなこ「やめてよ、降ろしなさいよ！」

きゃーきゃー言っているきなこ。

その後から八雲が、スーツケースを転がしながらついて行く。

八雲「あんたはトラブルメーカーだ。ココで止めなきゃ、今度こそボスに殺される」

同・店の裏

割れた壺や、埃を被った皿等が積んである。

きなこを真ん中にぶら下げて、2人の男が店から出て来る。

きなこを降ろす。というよりは、放り出す。

きなこ「痛っ！乙女はもっと優しく扱いなさいよ」

八雲はスーツケースをきなこの方へ投げると、ドアの向こうへ消える。

きなこ「んもう！」

きなこ、スーツケースを拾う。

後ろから、ぼきぼきと骨を鳴らす音がする。

きなこ「！（振り返る）」

2人の男が、首や手足の関節を鳴らしている。

きなこ、スーツケースを置き、構える。

いきなり1人の男が、大きく蹴りを入れて来る。

きなこ、くぐって床に転がる。

同じ男の低い蹴りが、きなこの頭をかすめる。

地面に転がったきなこが見たものは、宙を飛ぶ別の男。

ぎりぎりまで我慢して、きなこ、逃げる。

男は地面に、ピターンと大の字になってしまった。

きなこ、素早く立ち上がる。

その男を踏み台にして跳び、壁を蹴り一回転し、更に男を踏みつけようとする。

そこへ、もう一方の男が飛びだして来て、きなこを肩車してしまう。

きなこ「わ！わ！この、変態！！」

きなこ、めちゃめちゃに男の頭を殴る。

男は脳震盪を起こして、倒れてしまう。

倒れたところは、地面に伸びていた男の上。

飛び降りるきなこ。

同・店内

品物を点検している八雲。

壺に汚れを見つけて、はあっと息を吹きかけ、袖でこする。

きなこの声「ちょっと！随分なこと、してくれるじゃないの」

八雲「！？(ぎょっとして見る)」

きなこが、スーツケースを持って立っている。

八雲「ありゃ、勝っちゃったの？」

きなこ「いいわね、中国へ連れてってよ」

八雲「いや、中国へは行かない」

きなこ「まだ、そんなこと言うの！」

きなこの蹴りが、八雲の持っている壺に襲いかかった時、

八雲「香港だ！」

きなこ「(止めて)は？」

八雲、しまった！と口を押さえる。

きなこ「そうなの？香港に現れると？」

八雲「(観念して)ああ」

香港国際空港・前

凱歌(37)が、弁護士(例のワイドショーにでていた)に伴われて出て来る。

彼らの目の前に、黒の高級外車が来て止まる。

凱歌「？」

助手席から男が降りてきて、後部座席のドアを開ける。

そこに座っていたのは、コー・村木(年齢不詳)。

コー、凱歌に鋭い視線。

凱歌も冷たい目で見ると、

視線を弁護士に移し、

コー「先生、ご苦労様でした。どうぞ、お乗り下さい」

弁護士、凱歌を促す。

凱歌、続いて弁護士が車に乗りこむ。

車、発進する。

少し離れた所でこの車を見張っていた、香港警察の車がつけ始める。

すぐに彼らの前に、1211の妨害車が出て来る。

わらわらと車から出て来た1211の男たちが、警察の車を囲む。

警官たち「！？」

男A「(中)カミさんを迎えに来ただけで、空港はわかりにくくて・・・」

男B「(中)おまわりさん、教えてよ」

車の中の警官たち、去って行く車を見つめている。

道路を走る車

凱歌を乗せた車、九龍へと向かっている。

同・車内

後部座席でコーと弁護士が、ひそひそと何事が相談している。

凱歌は流れる外の景色を見ている。

日の光に輝く、香港の街並がまぶしい。

クリスマスが近く、街は普段以上に華やいでいる。

湾(回想・17年前)

夜。

小さな汚い船が浮かんでいる。

1211の密輸船だ。

中国から香港へ密輸品を運んでいる。  
荷物の間に隠れている凱歌（２０）が、香港の街を見つめている。  
猥雑で華やかな夜景。  
その光が凱歌の顔を照らす。  
希望と不安が入り混じった表情。

高級マンション・前（現在）  
車が来て止まる。  
助手席から男が出てきて、後部座席のドアを開ける。  
凱歌が降りる。  
続いてコーが降りる。

コー「（中国語で男へ）ここで待っている」  
マンションを見上げている凱歌。  
コー「行くぞ」  
コー、マンションの入り口へと向かう。  
ついて行く凱歌。

同・内  
エレベーターのドアが開く。  
出て来る凱歌とコー。  
すぐに玄関がある。  
ワンフロアーにワンルールの贅沢なマンションである。

コー「これからのお前には、この位のところがふさわしい」  
凱歌「？」  
コー「なんなら、日本からおっかさんと呼んで、一緒に住めばいい」  
凱歌「母は、大野さんのところに戻った。幸せを邪魔する気はない」  
コー「寂しいな。もう会わないつもりか」  
凱歌「殺すために連れて来たんじゃないのか」  
コー「殺す？（ふっと笑い）お前はまだ使える」  
凱歌「１２１１のために仕事なんかしない」  
コー、部屋のドアを開ける。  
コー「さあ、どうぞ」  
と、いざなう。

同・部屋内  
入って来る凱歌、続いてコー。  
凱歌、呆気にとられている。  
さんさんと降り注ぐ日の光。  
その光を受けて、部屋の調度品がきらきらと輝いている。  
必ずしも趣味の良い品とは言えないが・・・。

コー「家具は一流品を揃えたが、気に入らなかったら言ってくれ。すぐ取り替えさせる」  
凱歌は手も触れようとせず、呆れて眺めているだけだ。

コー「ん？駄目か？全部？」  
コー、気を取り直し、不動産屋にでもなったつもりで、キッチンから順番に案内を始める。

コー「ほら、ここが台所。食器はとりあえず、この位揃えておいたから」  
作り付けの食器棚を開けると、様々な食器が大量に並んでいる。  
コー、トイレへ移動する。



コー「トイレだ。ウォシュレット付き」  
スイッチを押し、湯をだしてみせる。  
凱歌は興味なさそうに、リビングルームのソファに座る。  
はしゃぐコーを見ている。  
彼の意図を計り兼ねている様子。  
コー、バスルームへ移動する。  
バスルームのドアを開け、  
コー「ここが風呂だ。凱歌、おいで」  
まるで子供のように呼んだ。  
コー「入りなさい。待っているから」  
凱歌、ちょっと自分の匂いを嗅ぐ。

#### 同・部屋のバスルーム

バスタブの中に、ゆっくりと体を沈める凱歌。  
バスタブはゆったりと広く、ご丁寧に、ジャクジーつきである。  
凱歌に、不思議と不安はない。  
ふと、鏡に映った自分の顔を見る。  
ゆっくりと体をまわして、左肩の後ろ側が映るようにした。  
そこには、狼をあしらった刺青があった。  
威厳さえ感じられる美しい狼が、左肩から背中の中ほどに描かれている。  
見つめる凱歌。

#### 香港・どこかの倉庫（回想・17年前）

凱歌（20）が両側から2人の男に腕をつかまれ、止まっている黒い高級車の前へ連れてこられる。  
車の後部座席の窓が、ほんの少しだけ開けられる。  
車の中から聞こえてくるボスの声。  
ボスの声「（中）私の仕事をしろ。そうすれば、母親を見つけてやろう」  
凱歌「本当に？」  
ボスの声「（中）約束する」  
凱歌「わかりました」  
逃亡の果ての、弱々しい決心だった。  
窓が閉められる。  
それを合図に、両側の男たちがぐっと力を入れ、凱歌を倉庫内へと引きずり込む。  
外から閉められていく倉庫の戸。  
そのわずかな隙間から、ボスの乗った車が走り去るのが見えた。  
倉庫の戸が閉まる。  
ぼんやりとした明かりの下で、1人の男が待っていた。  
彼の手には真っ赤に焼けた焼印。  
両側の男たちに、床にねじ伏せられる凱歌。  
シャツの背が破られる。  
焼印を手に、男がこちらへやって来る。  
にやにやしなながら、  
男「（中）これで1211とすぐわかる。それで、ゴタゴタは解決だ」  
凱歌、暴れて逃げ出そうとする。  
男たち、しっかりと押さえつける。  
男が凱歌の左肩に焼印を押しそうになった時、その男が吹っ飛ぶ。  
凱歌を押さえつけていた2人の男も吹っ飛ぶ。

3人の男は床に転がった。  
ボスの声「(中) やめろ」  
ボスが手も触れずに、男たちを吹っ飛ばしたらしい。  
凱歌が立ち上がろうとする。  
ボスの声「(中) そのまま」  
凱歌は逆らえずに、そのままうつぶせになっていた。  
ボスの姿を見ることはできない。  
誰かが近づいて来る足音。  
と、凱歌の背中に体重がかけられる。  
刺青師である。  
ボスの声「(中) これと同じものを、そこへ入れてくれ」  
凱歌が少し顔を上げると、ボスの背中があった。  
背中から腰にかけて描かれた、美しい狼の刺青。  
思わず見とれてしまう凱歌。  
が、刺青師によって、頭を押さえつけられてしまう。  
凱歌の肩に痛みが走る。  
思わず呻き声をもらしてしまう。  
上から見て一。  
ボスの背中の中の狼が、凱歌の肌へと写されていく。  
儀式のように。  
痛みを耐えているが、次第に意識が朦朧としてくる凱歌。  
構わず、背に刻まれていく狼。  
それはボスのものよりもこぶりではあるが、美しさは変わらない。  
凱歌を睨みつけているボスの背の狼。  
{ \*狼は野盗で侵掠(しんりゃく)を本職とする。昔の中国人はシリウス(天狼星)を野盗の目になぞらえた。この紋様を首斬り斧に用いた。: 林巳奈夫著中国古代の神がみ参照 }

マンションの凱歌の部屋・バスルーム(現在)  
凱歌が風呂から上がると、服が消えている。  
仕方なくバスローブを引っ掛けて、リビングルームの方へ行く。

同・リビングルーム  
凱歌、来る。  
コーはいない。  
窓に近寄る。  
香港の街が、霞んでいる。  
ここで生きている人たちの熱気であろうか。  
奥の部屋に気配を感じて行く。

同・ベッドルーム  
凱歌、来る。  
コーが満面の笑みを浮かべて、大きなベッドに座っている。  
その後ろでは、壁一面のクローゼットが全開になっている。  
クローゼットの中、色とりどりの服が、端から端までぎっしりと詰まっている。  
コー「どれでも選べ」  
凱歌「・・・」  
コー、立ち上がり凱歌に近づいて来る。

真っ直ぐに凱歌の目を見ている。

凱歌もまた、コーの目を見ている。

彼の真意を探るように。

しかし、コーの何のもくろみもない、純粋な目にとまどってしまう。

コーは凱歌の前まで来ると、いきなり抱きしめた。

凱歌の濡れた髪が、コーの鼻をくすぐる。

コー「(笑って)もう、乳臭くないんだな」

突然の行動に驚く凱歌。

凱歌「!?・・・他人・・・アレルギーじゃなかったのか」

コー「ああ」

凱歌「だったら」

コー「久しぶりだ。これが人のぬくもり・・・か」

凱歌「放せ」

凱歌はコーから逃れようとするが、強い力で身動きがとれない。

コー「俺がこうして触れられるのは、お前しかいない。もうどこへも行くな」

凱歌「何を言っている？」

コー「生き別れになった弟に会えたら、思い切り贅沢をさせてやろうと思った」

凱歌「弟？」

コー「だって、その子は家族と別れて、絶対に不幸に違いないから」

凱歌「・・・」

コー「俺の家は貧しかった。なのに客人が来た時は『面子』のために、借金までしてもてなした」

凱歌「前に・・・」

コー「ある時、腕のいい料理人を雇った。次から次へとでてきたご馳走を、今でも覚えている。お前の作った料理を食べた時、あの味を思い出した」

凱歌「エビとカニの違いもわからないくせに？」

コー「(無視して)宴が終わって、親父はその料理人に何を渡したと思う？」

凱歌「(声がかすれる)金・・・だろ？」

コー「赤ん坊だ。弟は南へと連れて行かれてしまった」

凱歌「・・・(不安)」

コー「二十年後、やっとその赤ん坊に会えた」

コー、凱歌の顔を覗きこむ。

コー「迷子の子犬のように、痩せて震えていたな。すぐに抱きしめてやりたかった」

コーが再び凱歌を抱きしめる。

コー「だが、その子の射撃の腕を見て、欲がでた。やっかいなことも抱えていた。すべて片づけてもらった」

凱歌「・・・(絶望的)」

コー「この仕事が終わったら、兄と名乗ろう。どんなわがママも聞いてやろう。そう思いながら、十五年以上が過ぎてしまった」

凱歌は力が抜けていくのを感じた。

反対に、コーの腕には力が入り、しっかりと凱歌を支える。

コーは凱歌のバスローブに手をかけ、左の肩を露にした。

狼の刺青が現れる。

コー「これを入れたのは、お前に俺の夢である1211を託すためだ」

凱歌「嫌だ！」

凱歌、思い切りコーを突き飛ばす。

凱歌「誰が、こんな組織のボスなど・・・」

コー「そのために、お前にカリスマ性を持たせた。だが、ちょっと誤算があったようだ」

凱歌「そうだ。僕は裏切った」

コー「汚名を挽回しろ。俺とお前の『面子』をたててくれ」

凱歌「(睨む)・・・」

コー「それとも、また、逃げるか？」

凱歌「(小さく)いや」

コー「いい子だ。夕めしは一緒に食おう。今、腹が減っているなら冷蔵庫を見てくれ」

母親のようなことを言って、出て行くコー。

凱歌「・・・(嫌な予感)」

同・キッチン

凱歌が来て、冷蔵庫を開ける。

ぎっしりと詰まっているインスタント食品。

凱歌「・・・」

それだけで腹がいっぱいになり、冷蔵庫をぱたんと閉じた。

同・ベッドルーム

凱歌、来てベッドに倒れこむ。

体を丸める、胎児のように。

凱歌「でも、僕は母さんの子供だ。いいよね、母さん」

凱歌が育った家(回想・32年前)

母・市江(33)が、ピアノで「アヴェマリア」を弾いている。

傍らで、幸せそうに聴いている凱歌(5)。

マンションの凱歌の部屋・ベッドルーム(現在)

大きなベッドの隅の方に丸まっている凱歌。

母の弾く「アヴェマリア」に包まれて、眠りに落ちていく。

香港国際空港・前

きなこと八雲が出て来る。

きなこはスーツケースとショルダーバッグくらいなのだが、八雲の方は何やら土産を大量に抱えこんでいる。

タクシーに乗りこむ。

タクシー・内

後部座席に座っている、きなこと八雲。

八雲「宿なんだが、1211の息がかかっていない所、1軒だけ知ってる。そこでいいか？」

きなこ「(強く)いいわよ。こうなったら覚悟、決めてるもんね」

八雲「(困惑)あんたのような女、俺には手に負えんよ」

香港・骨董街

キャット・ストリートに行く、きなこと八雲。

細い路地に露店が並ぶ。

骨董品やら「これが売り物？」と疑いたくなるような品々が並ぶ。

きなこ、面白そうに見ているが、八雲のはしゃぎっぷりには敵わない。

八雲が頻繁に足を止めては店の中を覗きこむので、なかなか前へ進んで行くことができない。

やっと、目当ての店に着く。

このあたりでは、最も古い店のようだ。  
八雲の祖母の家である。

同・八雲の祖母の店内

他の店の数倍もの品物が、ごちゃごちゃと置いてある。  
それらを蹴飛ばさないように気をつけながら、八雲がきなこを奥へと案内して行く。  
祖母が迎える。  
祖母と孫が再会を喜ぶ。  
八雲、大量の土産を祖母に渡す。  
おばあちゃん子のようだ。

八雲「きなこさん、俺のバアちゃんだ」

きなこ「何よ、思い切りあんたの息がかかっているじゃない」

八雲「バアちゃんには、1211のことは言ってない。俺のこと、日本で成功している社長さんだと思ってる」

きなこ「ふーん、ま、社長には違いないんじゃない」

祖母が厳しい目で、きなこを上から下までじろじろと見ている。

きなこ「(気がつき)え?何?」

八雲「いや、その・・・」

と口ごもる。

祖母が中国語で、何事か八雲にきつい調子で言う。

きなこ「ちょっとお、気になるじゃない」

八雲が申し訳なさそうに、頭をかく。

八雲「どうやら、あんたを俺の嫁さんだと思ってるらしい」

きなこ「えーっ!やだよ。早く、違うって言って!」

八雲が中国語で説明を始めると、今度は、祖母は気の毒そうな目をきなこに向ける。

きなこの手を取り、

祖母「(かたことの日本語で)あなた、若い。きれい。かわいそう」

「きれい」までは納得したが、

きなこ「かわいそう、って?」

キッと八雲を睨む。

八雲「あ・・・逃げた男を追いかけて、日本から来たって説明した」

きなこ「(胸倉をつかみ)ふざけんな!」

八雲「だ、だって、簡単に言うとそうだろ。複雑な事情は、バアちゃんにはわかんないよ」

きなこ「(放して)そう。そうだね」

マンションの凱歌の部屋・前(夜)

コーがインターフォンを鳴らす。

ドアが開かれる。

コー「(見て)何だ、そのかっこうは?」

ドアを開けた凱歌は、白衣に前掛けをつけ、頭に白いタオルを巻きつけた料理人の姿だった。

コー「(イライラして)早く着替える」

凱歌「いや」

コー「何?」

凱歌「ちょっと」

凱歌、ドアを大きく開けてコーを迎え入れる。

同・ダイニングルーム(夜)

凱歌がコーを案内して来る。

テーブルの上を見て、コーは目を見張った。

前菜からスープ、肉料理、魚料理、チャーハンまで、中華料理がところ狭しと並んでいる。

コーは携帯電話を取り出した。

コー「(中) レストランはキャンセルだ」

凱歌、頭のタオルをとって、コーに「どうぞ」と指し示す。

コーがテーブルにつく。

向かい側に凱歌が座る。

コー、いそいそと箸を取り料理を一口、口に入れる。

コーの顔がぱっと明るくなる。

それを、優しいが、ある決意を持った眼差しで見ている凱歌。

兄と弟の晚餐会は、何も語らぬうちに過ぎていく。

窓の外には、香港の夜景が広がっていた。

八雲の祖母の家・居間(夜)

テーブルの上には家庭料理が並ぶ。

椅子に座っているきなこ。

キッチンから、更に料理を運んで来る八雲。

八雲「さあ、どんどん食べてくれ。バアちゃんの料理は、中国のおふくろの味だ」

きなこ「ありがとう」

八雲「香港警察と連絡、とれたのか」

きなこ「うん。やっぱり、香港に現れたそうよ、ホイさん。ボスが迎えに来たって。一足  
間違いだった。酷い目に遭っていなきゃいいけど」

八雲「組織を脱走し、ボスを倒そうとしたからな。リンチぐらいは」

言ってから「しまった」と思う。

きなこが真剣な表情で見ている。

きなこ「殺されない、よね」

八雲「あ、ああ。あいつはナンバーワンの殺し屋だぞ。何度も修羅場は潜り抜けてきてん  
だ。大丈夫さ」

きなこ「(複雑) 殺し屋・・・」

八雲「あ、そのー、俺も情報、集めてやるから」

祖母がビールを運んで来る。

八雲「(受け取り) ほら、飲んで飲んで」

きなこに勧める。

ビールはしっかり飲む、きなこ。

八雲「(ぼそりと) 俺、何でこんなにいい人、やってんだ？」

きなこを見ると、祖母には笑顔を見せるが、どこか寂しげだ。

八雲、胸が痛くなる。

マンション・凱歌の部屋・前(数日後の夜)

コーがインターフォンを鳴らす。

ドアが開かれる。

コー「(見て) うむ、いいだろう」

凱歌、今夜は黒のチャイナ服だ。

ホテル・前(夜)

1211が経営するホテル。

正装しなくては入れないのではないかと、思うくらい豪奢である。  
香港中の明かりを集めたかのように、きらきらと輝いている。

コーの住まいでもある。

1 2 1 1 の中枢的なところだ。

黒の高級外車が来て止まる。

ベルボーイがすぐさま来て、車の後部座席を開ける。

コー、続いて凱歌が降りて来る。

コー「最上階で皆が待っている。アジア中の幹部が、集まっているからな」

凱歌「・・・(ホテルを見上げる)」

凱歌の前に、威圧的に建っているホテル。

同・最上階の部屋(夜)

ボス主催の晩餐会である。

テーブルの上には、豪華な料理が並んでいる。

1 2 1 1 のアジア中の幹部が集められており、異様な雰囲気包まれている。

雑談をしながらくつろいでいるようだが、実はそれぞれの腹のさぐりあいだったりする。

特にナンバー2である周(45)にくっついているナンバー3の陳(43)は、ずる賢く油断のならない男だ。

周の方も、冷たい目をした計算高い男である。

陳は体が大きくいかにも力づくで、ここまでのしあがってきたような感じ。

一方、周は神経質そうな細身の男だ。

コーと凱歌が入って来る。

一同、話をやめて見る。

コーだけ中央に進む。

コー「(中)皆、ご苦労。今夜集ってもらったのは他にもない、今まで待たせてきたが、後継者をはっきりさせておこうと思ってな」

周と陳が、居ずまいを正す。

コーが凱歌を呼ぶ。

前へ進む凱歌。

コー「(中)王凱歌を知っているな。組織に戻させたから。これを私の後継者にする」  
ざわつく会場。

なぜ王凱歌なのか、疑問が会場中に広がる。

凱歌を裏切り者と呼ぶ者もいる。

陳が周に厳しい顔で何事か囁く。

周の顔が強ばっている。

周と陳の様子を、冷静な目で観察している凱歌。

コーが手を挙げると、会場は静かになる。

コー「(中)俺は事情があって、女とは接触できない。だから、1 2 1 1 の血を継ぐ者は、王凱歌しかいない。彼は俺の実の弟だ」

再び会場の中がざわつく。

周と陳が凱歌を睨む。

凱歌、視線を外す。

と、会場の一番後ろで影が動いた。

凱歌「！」

凱歌、影を追って部屋を出る。

同・最上階の部屋の前(夜)

部屋から出て来た凱歌が、一方を見て名前を呼ぶ。

凱歌「范火清！」

金色のライオンのたてがみのような髪をした長身の男が、立ち止まりゆっくりと振り向いた。

范火清（32）である。

范「やあ、凱歌兄さん、お帰り。それから、おめでとうって言えばいいのかな」

凱歌「いや」

范、頭痛がして頭を押さえる。

凱歌「どこか？（はっとして）沖浦島での・・・？」

范「後で会おう、兄さん」

凱歌「後？」

范「俺たちは決着をつけないと。そうだろ。だって、兄さんが俺をスナイパーにしたんだからな」

吐き捨てるように言うと、くると背を向け歩いて行ってしまう。

見送る凱歌。

香港の街・裏通り（回想・12年前）

モノクロで。

歩いて来る男が2人。

前を行く范火清（20）。

やや離れて、後ろから王凱歌（25）。

2人共、黒のロングコートにサングラス。

范は手に、ライフルが入っているケースを持っている。

范が日なたを歩いている時、後ろの凱歌は建物でできた日陰に入ってしまう。

それが交互になる。

范が日陰に入ると凱歌が日なたに現れる。

明と暗のコントラスト。

その光景に、凱歌と1211の男との電話での会話が被る。

男の声「（中）親になってほしい」

凱歌の声「（中）知っているだろう。僕はやらない」

男の声「（中）そう言ったんだが、自分の名をだせばお前が引き受けるだろう、と」

凱歌の声「（中）名前？」

男の声「（中）范火清」

ビルの屋上（回想・12年前）

サングラスを取って、狙撃の体勢に入っている范。

同じくサングラスを外して、隣で双眼鏡を覗いている凱歌。

范、スコープの中に標的の男（車に乗ろうとしている）を捉える。

范、引き金を引く。

が、スコープから男の頭が消え（愛人が車の中から引っ張った）弾丸が車をかすめていった。

焦って、もう一度引き金を引こうとする范。

凱歌がライフルに手を置き、止める。

范「？（見る）」

凱歌「・・・（小さく首を横に振る）」

凱歌、そのままライフルを范から取り上げる。

凱歌、歩き出す。

范、ついて歩き出す。



凱歌、コートのポケットから拳銃をとりだすと、范に放る。  
受け取る范。  
凱歌と范、だんだん早足になっていく。  
コートが風になびく。  
走り出す。  
ビルの端から同時に飛ぶ。  
青い空に飛び出した2人。  
しなやかな2匹の狼が、空を駆けて行く。

ホテル・前（回想・12年前）

清潔感のあるホテル。  
外国人が多く出入りしている。  
外車が来て止まる。  
車の中から数人のボディーガードが出て来て、周りを警戒する。  
胸のあたりに手を入れ、いつでも拳銃を取り出せるようにしている。  
後部座席から、先ほど范が狙っていた男が降りて来る。  
走ってくる范。  
気がつくボディーガードたち。  
拳銃を取り出そうとする。  
が、何者かが発した銃弾に次々と倒れる。  
辺りは騒然となる。  
悲鳴を上げながら逃げ惑う者、身を伏せる者。  
1発で倒されていくボディーガードたち。  
撃ったのは凱歌。  
建物の陰からライフルで撃っている。  
范、倒れたボディーガードたちを飛び越えて、標的に近づく。  
標的の男も拳銃を抜くが、一瞬早く范の放った銃弾が頭を撃ち抜いた。  
車の中の愛人が悲鳴を上げる。  
愛人をも撃つ范。  
范、更に男と愛人を交互に撃つ。  
その范の拳銃が、銃弾で飛ばされる。  
范「?!（銃弾が飛んできた方を見る）」  
凱歌がライフルを構えている。  
凱歌、范を手招きする。  
范、凱歌の方へ走り出す。  
凱歌、范を待って、一緒に走り出す。  
凱歌「1発だ。1発で仕留めろ」  
范「確実に殺したいんだ」  
凱歌「だったら、1発だ」  
凱歌、ライフルを捨てる。  
夕暮れの迫る街の中へ消えていく、2人のスナイパー。

香港・市場（回想・12年前）

夕暮れ時。  
活気のみなぎる市場。  
商店や露店が並んでいる。  
商売上手な商人たちが、客を呼びこむ。  
大勢の買い物客が、店をまわっている。

走って来る、凱歌と范。  
范は通り過ぎる時、果物を2つ、店からかすめとる。  
1つを凱歌に放る。  
受け取り、渋い顔の凱歌。  
范は笑いながら、果物をかじる。  
初めて人を殺して、気持ちが高揚しているようだ。  
市場の中を駆け抜けて行く。

范「兄さん、俺は生きている！」  
凱歌「自分の中で何かが殺されたことに気がつくよ、すぐにな」  
范「(笑って)兄さんはセンチメンタルだね。娼婦にでもなればいい」

香港・繁華街(回想・12年前)  
夜の闇がすぐそこに迫っている。  
街には人工の明かりが灯り始めている。  
走っている凱歌と范。

女の声「(中)お兄さんたち、どこ、行くの？」  
その声に、凱歌と范が同時に立ち止まり、振り返った。  
声をかけてきたのは、水商売風の女だ。  
2人を見てにこにこしている。  
女「(中)若いんだから、時間はたっぷりあるんでしょ。せかせかしないで、ちょっと遊んでいってよ」  
凱歌と范が周りを見回すと、ごみごみとした繁華街だ。  
このあたりで商売に励んでいる男や女たちが、客を物色している。  
夜を待ち切れない人々が、集まって来ている。

范「ふふ、街の妖精たちがお出迎えだ」  
凱歌「ここならいい。1211の縄張りだ」  
范「空を飛べたような気がした」  
凱歌「え？」  
范「凱歌兄さんと一緒だったから。でも、結局、1211(ここ)へ帰って来てしまった・・・」  
凱歌「だったらどうして、1211なんかに入ったんだ」  
范「兄さんこそ。俺の知っている兄さんは、殺し屋なんてものから一番遠い人だった」  
凱歌「・・・」  
范「(中)じゃあね、バイバイ、兄さん」  
范は声をかけてきた女の肩を抱き、行ってしまふ。  
彼の前途を思う凱歌。

地下室(回想・12年前)  
暗い地下室に、裸電球が1つ揺れている。  
数人の男たち(1211)に押さえつけられている、上半身裸の范。  
凱歌が、壁にもたれて見つめている。  
范の肩に焼印が押される。  
范が叫び声を上げる。  
凱歌、顔をそむける。

ホテル・最上階の部屋・前(現在・夜)  
上から見て。  
范が去って行った方を見ている凱歌。  
部屋のドアがすべて開いて、幹部たちがぞろぞろと出て来る。

黒い頭や白い頭、スキンヘッド、様々な頭が出て来る。  
コーの頭が凱歌に近づき、肩に手を置く。  
凱歌、ちらりと見る。  
人々の頭の動きが止まり、凱歌とコーの様子をじっと見ている。  
コー「上への紹介は終わった。今度は下だ。手荒い歓迎を受けるだろう」  
周の頭に陳の頭が近づき、ひそひそと耳打ちをしている。

八雲の祖母の家・居間（夜）  
壁にかけてあった、上着をとるきなこ。  
きなこ「間違いはないわ。そのホテルにボスが来る」  
八雲、椅子にかけたまま、きなこが身支度をしているのを見ている。  
八雲「会ってどうする？」  
きなこ「ホイさんの居場所を聞き出す」  
八雲「(笑い) 甘いな」  
きなこ「(構えて) 腕づくで」  
八雲「(考えて) もう1つ、噂がある。ちょっと危険だが、ボスに近づけるかもしれない」  
八雲、奥の部屋へ消える。  
きなこ「私、行くわよ」  
八雲、服の塊を持って来る。  
それをきなこに投げる。  
きなこ「(受け) 何？」  
八雲「それに着替えて。女は駄目なんだ。男に変装しろ」  
きなこ「？」

周が経営する賭博場・前（夜）  
繁華街の外れにある、黒い建物。  
小さくてなんの変哲もない。  
窓もないし、中から音も漏れてこない。  
八雲に連れられて、男装したきなこが来る。  
男装と言っても、八雲の服をだぶだぶながら何とか体に合わせたもの。  
しかし、そのたるみが、うまく女の体の線を隠している。  
髪と顔を隠すため、帽子を深く被っている。  
きなこ「ね、どうして親切にしてくれるの？」  
八雲「生きて帰って来たら、そう言ってくれ」  
きなこ「・・・(緊張)」  
八雲「(微笑む) バアちゃんがさ、あんたのこと、気に入っているみたいだから」  
きなこ「(も微笑んで) おばあちゃんのこと、好きなのね」  
八雲「俺が小学校にあがる頃だったか。カアちゃんが病気になって、どうしようもなくな  
った。そしたら、バアちゃん、日本へ来てくれたんだ」  
きなこ「え？1人で？」  
八雲「すごいだろ。嬉しかったよ、アパートの廊下から中国の歌が聴こえてきた時は」  
きなこ「心強かったね」  
八雲「その時、はじめて会った」  
きなこ「そうなんだ」  
八雲「昔話(緊張し) じゃあ、乗りこもうか」  
きなこ「・・・(うなづく)」  
きなこ、顔を見られないように下を向く。  
八雲、壁にしか見えないドアをノックする。

やはり壁にしか見えない小さな窓が開けられ、男が顔をだす。  
男「(中)今夜は貸し切りだ。明日、来い」  
引っ込みそうになる男を捕まえて、  
八雲「(中) 1 2 1 1 だろ」  
男「・・・(指で合図)」  
八雲、シャツをはだけて左肩の焼印を見せる。  
男、懐中電灯で確認する。  
男「(中)へえ、日本から来たのか？」  
八雲「(中)弟の誕生日で、こっちへ帰って来たのさ。プレゼント代わりに、ここで遊ばせてやろうと思って。いいだろ」  
男「(中)じゃ、こっちの小僧は組織の人間じゃないんだな」  
懐中電灯の光が、きなこに当てられる。  
ますます下を向くきなこ。  
八雲がさえぎるように前へ出る。  
八雲「(中)頼むよ。こいつだって、いずれは組織のために働くんだ」  
窓が閉じられる。  
失敗か、と焦る八雲。  
しかし、ドアが開けられた。  
男が手招きしている。  
男「(中)幸運を」  
ほっとして、八雲ときなこ、中へ入る。

同・内(夜)

八雲、続いてきなこが、男の傍らを通り過ぎようとする。  
男「(中)あ、そうだ」  
2人、ぎくりとして止まる。  
男「(中)今夜は酒も薬も禁止だ。行儀良くしろよ。大切なお客さんが来るからな」  
八雲「(中)ああ、わかった」  
きなこ八雲が、地下への暗い通路を進み始める。  
八雲「間違いない。ボスが来る」  
きなこ「そう・・・(気になり)ねえ」  
八雲「何だ」  
きなこ「その、肩の、ホイさんにもあるのかな」  
八雲「えっ！一緒にいたのに、知らなかったのかい？」  
きなこ「・・・」

同・VIP席への入口・前(夜)

周が扉の前に立っている。  
凱歌、コー、そして1 2 1 1の幹部たちが見守っている。  
陳もいる。  
仰々しく手を広げ、  
周「(中)ようこそ、王凱歌、お前を歓迎するよ」  
扉が内側から開けられる。  
見つめる凱歌の顔に、まぶしい光が当たっていく。